9月14日のウクライナ情報

安斎育郎

❶【解説】チャレンジャー2 戦車はいかにして破壊されたか（2023 年 9 月 13 日）

2023 年 9 月 4 日、ザポロジエの南東 66 キロにあるラボティーノ村付近での戦闘で、ロシア軍は英国製戦車チャレンジャー2 を破壊した。これは確かな事実である。戦車が被弾した瞬間のロシアの無人偵察機によるビデオ記録があるが、明るい閃光と高い煙柱が上がる様子が映し出され、その後に、燃えた戦車の様子と、また、その間近にいる、ウクライナの兵士の姿も確認されている。

発表によれば、チャレンジャー2 を破壊したのは、コルネット D1 対戦車ミサイルの一撃だった。駆逐戦車は、ウクライナのチャレンジャー2 が標的を探す瞬間を待ち、左旋回した砲塔の真下にミサイルを命中させた。弾薬は爆発し、乗員は死亡、戦車は炎上した。

これは、西側社会にとっては衝撃的なニュースだった。ほとんど無敵だと思われていた 420 万ポンド（7 億 7300 万円）の戦車は、初めての戦闘で破壊された。

ザポロジエ州での戦闘で、露軍が別のチャレンジャー2 戦車を撃墜したという報告もある。

装甲に優位性なし

ロシアの戦車兵と駆逐戦車は、独戦車レオパルド 2 をはじめとする多くの西側装甲車を破壊してきた結果、欧米の戦車には特に優位性はないという結論に達した。どんな戦車も攻撃で破壊することができる。

英国戦車が破壊された後、ウクライナに米国製戦車 M1A1 エイブラムスが与えられれば、それも破壊されるだろうという確信が生まれた。

西側の戦車は長い間、防御性が高く、ほぼ無敵だと考えられてきた。しかし、ウクライナでの戦争経験は、それが実際のことではなく宣伝であったことを示している。これらの戦車の装甲は不均一だ。最も防御力が高いのは、車体前部と砲塔だ。これらの部分は、2 層の装甲鋼鉄のパッケージで保護されており、その間にファイバーグラスまたはセラミックの装甲が挿入されている。この装甲は徹甲弾や成形炸薬弾に耐えるように設計されている。比較のためにロシアの装甲を説明すると、使われている複合装甲は、異なるタイプの弾薬に対して防御力を発揮する従来の鋼鉄装甲と同等となるよう計算され、作られている。例えば、独製レオパルト 2A5 の装甲を例にとると、砲塔前面の貫通防御の為の装甲の厚さは徹甲弾で 900 ミリ、成形炸薬弾では 1300 ミリ、車体前面は徹甲弾に対して 600 ミリ、成形炸薬弾に対して 700 ミリだ。英国製チャレンジャー2 は、砲塔前面は徹甲弾に対して 800 ミリ、成形炸薬弾に対して 1200 ミリ、車体前面は徹甲弾に対して 700 ミリとなっている。

しかし砲塔と車体の側面と後部は防御力が低い。西側の戦車は非常に重く、設計者は重量を減らすために装甲を減らさなければならない。チャレンジャー2 の総重量は 73 トン、M1A1 エイブラムスは 66.8 トン、レオパルト 2 は 66.5 トン。それに比べてロシアの戦車 T-72B3 の重量は 41 トンである。砲塔の前面は徹甲弾に対して 800 ミリ、成形炸薬弾に対して 1200 ミリ、車体の前面は徹甲弾に対して 750 ミリ、成形炸薬弾に対して 1100 ミリとなっている。

以上から、西側の戦車は防御面で大きな優位性を持っていない。加えて、装甲の薄い脆弱な箇所も十分ある。多くの戦いを経てきたロシアの戦車は、側面や車尾への砲撃に対する防御性がより高い。

英国制戦車はイラクで戦い、2 度被弾している。2006 年 8 月、イラク南部のアル・アマラの戦闘で、イラクの戦闘機が露軍の RPG-29 弾を発射し、チャレンジャー2 の車体前面下部を貫通、乗員が負傷した。2007 年 4 月、イラクのバスラでは、戦車の下面に成形炸薬弾が撃ち込まれ、乗員が負傷した。

どちらの場合も戦車は破壊はされなかった。しかし、英国防省は戦車乗員に対する謝罪を迫られた。

戦車内で大爆発

ロシアの戦車が米国、英国、ドイツの戦車と違うのは、自動装填装置を備えている点である。この機械装置は 40 キロの砲弾を約 2 秒で砲に装填することができるため、乗員は車長、運転手、砲手の 3 人で構成される。日本の 90 式戦車や 10 式戦車にも自動装填装置があり、乗員は 3 人である。

西側戦車には自動装填装置がないため、砲の装填は手動で行われている。乗員は車長、運転手、砲手、装填手の 4 人で構成される。このような事情から、戦車の容積は大きくなり、より多くの装甲が必要となり、戦車は重くなる。

装填手は戦車の大きな弱点である。戦闘中、乗員は火薬のガスで中毒になり、装甲への砲撃で聴覚を失う。装填手は 43 キロの砲弾を弾薬庫から取り出し、その砲弾を持って移動し、砲に装填しなければならない。これらはすべて、非常に迅速に行わなければならない。遅れは敵に射撃と命中のチャンスを与える。英国製チャレンジャー2 は 8 秒で 1 発撃つことができるが、ロシアの戦車はその間に 2 発、あるいは 3 発撃つ。8 秒というのは射撃練習場でのことだ。戦闘中に疲れ、火薬のガスに毒され、聴覚を失った装填手が銃を再装填する速度は、乗員が死に接近するスピードよりはるかに遅い。

装填手の利便性を高めるため、英国製チャレンジャー2 の砲弾は砲塔後部に配置されている。約 30 個の砲弾が密集して積み重ねられている。砲塔のこの部分の装甲は正面部分よりもはるかに薄い。一方、コルネット D1 のようなロシアの対戦車ミサイルは、正面装甲の、最高 1300 ミリの通常の鋼鉄装甲を貫通するようにつくられている。そのため、ウクライナのチャレンジャー2 が砲塔を横向きにしたとき、ロシアの駆逐戦車は戦車の最も脆い部分に命中した。ミサイルの爆風は砲塔後部の薄い装甲を簡単に突破し、砲弾の火薬に引火した。戦車内部で 300 キロを超える強力な火薬が爆発し、ウクライナの戦車兵は悲鳴を上げる暇さえなかった。灰と焼けた骨の跡がほんの少し残っただけだった。

ある意味、チャレンジャー2 は自己宣伝と特異な戦争経験の犠牲者になったといえる。英国の戦車がイラクで相手にした敵は、近代的な戦車も近代的な対戦車ミサイルも持っていなかったからだ。だが、実際、武装した敵を相手にした戦いでは、チャレンジャー2 は生き残ることはできなかった。

❷「核の脅威」懸念で出された道徳的要請　では、一体何がこの事態を招いたのか（2023 年 9 月 12 日）

チャーチルはかつてこう言った。米国人は常に正しい決断を下すが、まずその前に正しい決断以外の全てを試すと。そうなったのがアフガニスタンであったし、今度はウクライナがそうなる番なのだろうか？　西側世界の文明は戦争と震撼を繰り返し、変容してきた。目の前に新たな変革が迫った今、我々は何を目にすることになるのだろうか？　ロシア外務省外交アカデミー、時事国際問題研究所所長のアレクサンドル・クラマレンコ特命全権大使はこうした問いを投げかけている（以下、同大使の論文をご紹介します）。

2023 年 5 月、広島の G7 サミット開幕間近の時期に、汎欧州シンクタンク「ヨーロピアン・リーダーシップ・ネットワーク」（ELN、拠点ロンドン、元英国 NATO 代表のアダム・トムソン氏が代表）は一連の諸国の元政治家、専門家らに呼び掛け、核大国に、特に米国とロシアに対し、戦略兵器の制限プロセスを再現するよう、2010 年に調印された新戦略兵器削減条約（新 START）が 2026 年 2 月に失効した場合、同条約が完全にフェイドアウトしないようメッセージを送るよう発案した。これは「世界規模の道徳的な要請」として出されている。特筆すべきなのは、ロシアと米国が同じまな板の上に乗せられ、この問題を「大国間の激化する競争」を超えてとりあげるよう、つまり（専門家らの認識としては）両国関係の、すべてを決定するコンテキストを超えてとらえるよう、呼びかけがなされていることだ。このコンテキストは開示されていないが、その理由は明らかである。

そもそも、軍備管理システム全体の解体を始めたのはロシアではない。すべては 2002 年、米国が 1972 年に締結の弾道弾迎撃ミサイル制限条約から一方的に脱退したことから始まった。これで、戦略攻撃兵器と防衛兵器の間のつながりが断ち切きられてしまったのだ。その先、さらに米国は、グローバルミサイル防衛システムの創設を欧州をポジションとして開始。トランプ政権も独自の「貢献」を行い、1987 年に締結された中距離核戦力全廃条約を破棄。トランプ氏が 2 期目も居残っていたならば、新 START も更新されることはなかっただろう。そうなれば、軍備管理の分野においてすべては完全にゼロに帰してしまい、特に警鐘を鳴らす人などいなかったはずだ。なぜなら行為が非難されねばならない大国はたった 1 国、米国だけだったはずだからである。

次に、一体誰が何を侵しているのか、という問題を考えよう。米国の言う、戦略兵器運搬機の不安定な使用による「迅速なグローバル打撃」という概念は何を意味するのか。その他の大量破壊兵器はどうだろうか？　化学兵器（米国は資金不足という馬鹿げた口実で、化学兵器の保管庫の廃棄を長い間遅らせてきた）や生物兵器は？　生物兵器については、米国とその西側同盟国は、生物兵器禁止条約の検証プロトコルに着手することをかたくなに拒み続けている。米国が世界中に所有する生物実験室のネットワークを見れば、ウクライナでの特別軍事作戦で暴かれた実験室の存在も含め、生物兵器を使っていないという米国のギャランティは信じがたい。

第 3 に、軍備管理には参加しないという英国と仏の口実にどれほどの説得力があるのか。英仏は自らを文明国だと考えており、しかも NATO という軍事・政治陣営において米国の同盟国である。マデレーン・オルブライト氏は米国務長官だった時代、NATO が「核同盟」である事実を想起させはじめた。確かに、1968 年の核拡散防止条約（NPT）に違反して、この条約上の核保有国ではない国々に核兵器へのアクセスを保障する「共同核ミッション」は存在する。その中には独も含まれている。NATO の 6 カ国の領土には米国の核兵器がある。ロシアは今回、特別軍事作戦のコンテキストでのみ、それに類似した行動をとる必要性が生じたため、同盟関係にあるベラルーシの領土に核兵器を配備した。なぜベルリンや他の欧州諸国の首都に、核拡散防止条約の義務の枠組みに戻るよう訴えないのであろうか？

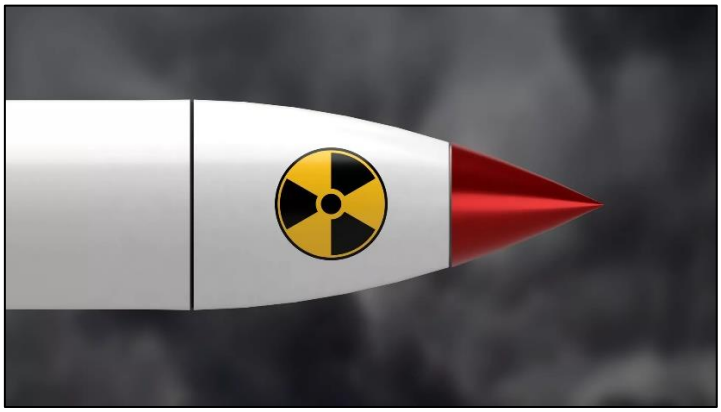
第 4 に、中国についてだ。米国に対して、中国を含む地政学的「トライアングル」（編集：露米中）全体

の核ミサイル能力を同等にすることに同意することを提案してはどうだろうか。そうすれば、中国にとっても多国間軍備管理プロセスへの参加を検討する動機になるかもしれない。つい先日、ミリー米統合参謀本部議長も米国、ロシア、中国からなる「3 つの近代的超大国」について言及したではないか。なぜ避けられない事態を待つ必要があるのか？　米国の抑止政策こそが、圧力や不安定化の脅威から守る手段として、米国の標的となる、あらゆる国を核兵器の保有へと駆り立てているのではないだろうか？

第 5 に、先日、採択された「核保有 5 大国」と G20 の宣言には核兵器の不使用と核戦争反対（これらは全く同じではない）への言及がある。ではなぜさらに踏み込んで、すでに発効している 2017 年の核兵器禁止条約への加盟を核保有 5 大国に求めないのであろうか。誰も核兵器を使おうとしていないのであれば、なぜ核兵器が必要なのか？　米国が 1996 年に採択の包括的核実験禁止条約（CTBT）に未だに加盟していないことにも、皆が黙ってみないふりをしている。沈黙といえば、広島への原爆投下についてもそうだ。軍事的な重要性のない、この日本の 2 都市（編集：広島と長崎）に対して、誰が何の目的で核兵器を使用したのかは語られていない。目的は明らかに、当時のソ連に「シグナルを送る」ことだった。

第 6 に、したがって、米国人エリートらの外交政策文化そのものとその道徳的基盤についての疑問がわく。なぜあらゆるものを封じ込めるのか？　しかも、中国やロシアといった他国の発展まで、米国の世界支配に対する脅威として、封じ込めようとするのか？　米国の世界支配は長らく、この国の存続の手段となってきた。なぜ他国に発展を許さないのか。なぜいちいち米国に許可を求めなければならないのか？

第 7 に、「ヨーロピアン・リーダーシップ・ネットワーク」は要求を米国につきつけたらよいではないか。結局のところ、これは欧州の将来がかかっている問題だ。米国の行動は欧州大陸の安定化に寄与すべきものであり、これによって不安定になってはならない。特別軍事作戦の終了後、欧州はいかなる状態にあるべきか、今はそれを考える時でもある。現在の状況の根幹には、欧州安全保障の全アーキテクチャの NATO 中心主義化が横たわっているが、これこそが根本的な悪習である。それがうまく機能せず、緊張と戦争につながるのであれば、欧州安全保障協力機構（OSCE）を基礎とする本格的な全地域的な集団安全保障システムの創設を考えてはどうだろうか。OSCE には、安全保障の不可分性、万人に平等な安全保障という原則を根底から覆すワシントン条約と互換性がないため、未だに規約すらない。遅かれ早かれ解決しなければならないこの問題について、政府とは、無関係で独立して行動する「ヨーロピアン・リーダーシップ・ネットワーク」の代表者や専門家たちは、なぜ専門家としての分析を行わないのだろうか。これは遅かれ早かれ解決せざるをえない問題であり、さらには、解決のために説得力のある選択肢が見つかれば、それはウクライナの和解にも貢献するはずだ。

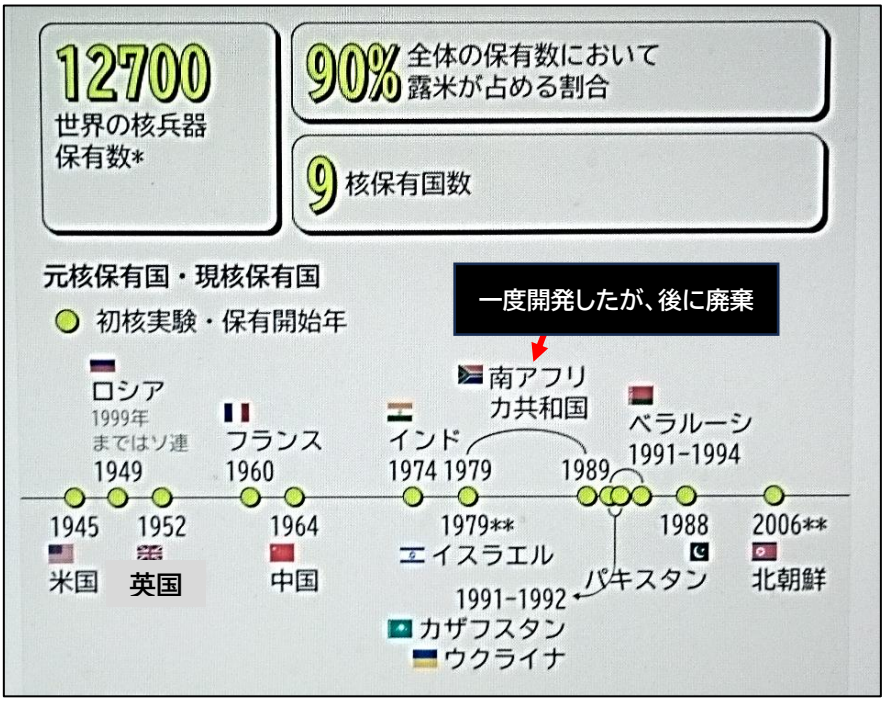


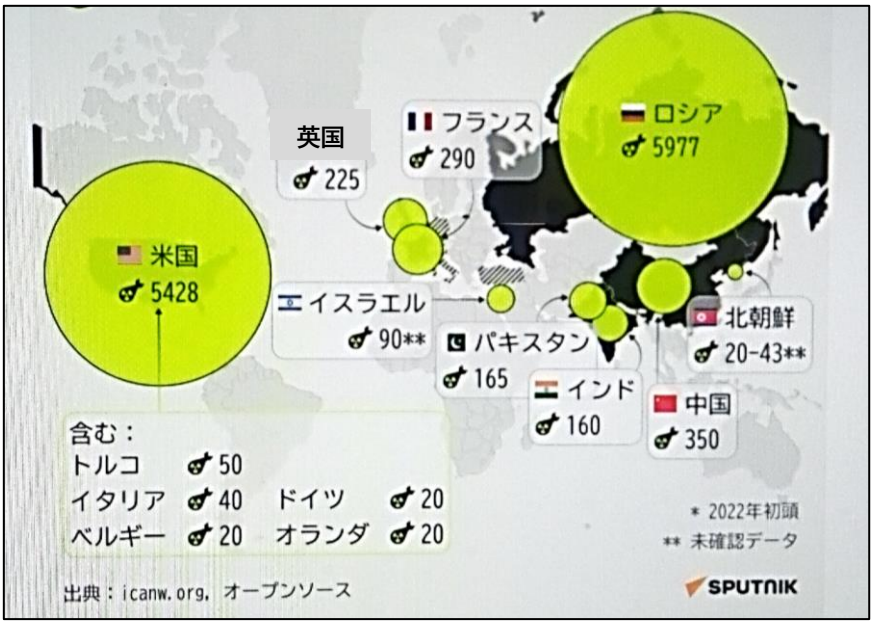
❸【図説】世界の核兵器保有の現状（2023 年 5 月 22 日）

2022年初頭時点で、世界の９カ国が核兵器を保有するとされている。また、世界には1万2700発の核兵器が存在し、このうちの 90 パーセントを米国とロシアが保有している。世界の核兵器保有をとりまく現状を、スプートニクがインフォグラフィックでお伝えする。

核兵器を保有するのは、核拡散防止条約（NPT）で「核兵器国」と定められたロシア、米国、英国、フランス、中国の 5 か国をはじめ、NPT 未加盟国のインド、パキスタン、そして 2003 年に NPT を脱退した北朝鮮の 3 か国。また、イスラエルも数十発を保有していると推定される。

上記の国の他、トルコ、イタリア、ベルギー、ドイツ、オランダの 5 か国が米国の核兵器を配備しており、有事の際にそれぞれの軍が米国の決定に基づき使用する。





※安斎注：ロシア側の発表は珍しいので紹介しましたが、面白いことに原資料では「英国」が全部「米国」と訳されていたので、修正しました。

❹米長距離ミサイル MGM-140 ATACMS はロシア軍なら迎撃できる＝元米海兵隊員（2023 年 9 月 12 日）

ロシア軍は、ウクライナが受け取る可能性のある、米国の長距離ミサイル MGM-140 ATACMS を簡単に破壊することができる。ブライアン・バーレチック元米海兵隊員は YouTube チャンネル『The New Atlas』に出演したなかでこう語った。

こうしたミサイルがあれば、ウクライナ軍は理論上は、ロシアの領内に攻撃をしかけることができる。

「ロシアはこの種の兵器に精通している。（中略）彼らはハイマースやストームシャドウを迎撃したし、MGM-140 ATACMS だって迎撃する」バーレチック氏はこう語った。

バーレチック氏は、米国はウクライナ軍へこのミサイルを供与すると公言している以上、これはクレムリンには寝耳に水にはならないだろうと指摘した。

「ロシアはすでに多くの方面の防衛を固めている。（中略）モスクワはとっくに準備済だ」バーレチック氏はこう述べた。

9 月 11 日、米国務省のマシュー・ミラー公式報道官は、米国はウクライナへの長距離ミサイル MGM-140 ATACMS の供給は検討しているが、これに関する新たな決定は下されていないと述べている。

❺声を詰まらせるプーチン（2023年9月13日）

毎日、1,000 人、1,500 人の人々が志願の登録に訪れている。毎日だ。

これが、ロシア人民、ロシア社会を特徴づけていることだ。正直に言うが、他の国であればこんなことがあり得るかどうか、私にはわからない。

人々はこのような状況の中で、戦線に行くことを知りながら自ら軍役に就くのだ。我が国の男たち、ロシア人は何が待ち受けているか知っている。祖国に命を捧げることになるかもしれない、体に重大な傷を負うかもしれないことを理解している。

それでも構わずに、祖国の利益を守るために、自ら自発的にそうするのだ。

https://twitter.com/i/status/1701628298546262094

❻東方経済フォーラムでのプーチン発言抜粋（2023年9月13日）

米国は同盟国やパートナーを粉砕している。彼らには友人などおらず自分達の利益しか考えていない。

🗣役人は絶対に国産車に乗るべきだ。

🗣政府はガソリン価格の状況に対処している。

🗣ロシアのビジネスは非常に責任ある行動をしている。

🗣宇宙開発は複雑で責任ある仕事だが、我々には優れた能力がある。

🗣ルナ 25 号の月面着陸が実現しなかったのは残念だが我々はまだ計画を終えていない。

🏐🐻🗣イーロン・マスクは傑出した人物、活動的で才能あるビジネスマンだ。

🐻🗣ボストーチヌイ宇宙基地、そこには私のプログラムがある。

🐻🗣ロシアの平均寿命は今年 74 歳になった。

🐻🗣ロシアでは伝統的・精神的価値を強化すべき。

🐻🗣移民流入の状況は慎重に扱うべきであるが、ロシアにゲットーを出現させてはならない。

🐻🗣ロシアは一般的に労働市場に多く移民労働者を雇っていない 。

🐻🗣ロシア人の利益は移民の流入よりも優先される。

🐻🗣選挙の日程が発表されたら指名問題について話そう。

🐻🗣米大統領選に関するワシントンの外交政策において、ロシアの方向性に根本的な変化はないだろう

🏐🐻🗣🐯トランプに対する刑事事件は政治的動機による迫害。

🐻🗣CN中国の発展を遅らせる事はできない。もう西側諸国は手遅れだ。

🐻🗣私は秘密を明かさない。

私は KGB で働いていた。😅

🐻🗣中国がアメリカを怯えさせたのは、チップではなく 10 億人の中国人がいて経済が猛烈なスピードで発展しているという事実だ。

🐻🗣様々な推計によるとロシア指導部に反対する 160 人の文化人が海外を旅行している。海外に行った人々は、ロシアを批判し西側で何かを「暴露」することが求められている。

しかし誰も去った人々がロシアに戻る道を閉ざさなかった。

🐻🗣米国がウクライナが交渉に応じると考えるなら、ゼレンスキーの交渉禁止令を撤回させるべきだ。

🐻🗣AFU の反攻による損失は 7 万 1 千人。反攻に成果はない。損失だけだ。

西側の手先はウクライナに領土の一部を可能な限り噛み砕き、それから交渉を始めるよう迫っている。

🐻🗣アメリカは誰がどう思おうがお構いなし、常に自分たちの利益になることをする。

🐻🗣ウクライナへの F-16 納入は何の影響もない。

🐻🗣米国の政治選挙システムは腐敗している。

🐻🗣FSB は、ロシア領土での軍事衝突の際にウク軍の破壊工作員を捕らえた。彼らの任務は原子力発電所の運転を妨害するために送電線を弱体化させることだった。このような試みは今回が初めてではない。

🐻🗣GB英国の諜報機関が米国の命令で動いていることは認める。

🐻🗣英国の安全保障機関は、私が真実を語っている事を知っている。

🐻🗣AMアルメニア指導部はカラバフに対するAZアゼルバイジャンの主権を基本的に承認している。
🐻🗣アルメニアとは何の問題もないし、パシニャンとも何の問題もない。
🐻🗣この 6～7 ヶ月で 27 万人が自発的にロシア軍に入隊する契約を結んだ。ロシアの男たちは、何が待っているのか、祖国の為に命を捧げる事ができるのかを理解し、それでもなお意識的に、自発的に行くのだ。
🐻🗣ロシアは自給自足すべきだが、それは国の孤立を意味するものではない。🐸

❼ゼレンスキーの言（2023年9月13日）

みんな成功したがる。ハッピーエンドになってほしいと思う。
まず、これは 1 時間半の映画じゃない。我々は反転攻勢の話をしている。こいつはハッピーエンドの映画じゃない。我々にハッピーエンドはない。

❽【特集】陶芸家の妻、カーチャさんが日本への思いを形に　日露カップル、ロシアの日常生活を配信中！（前編、2023 年 9 月 13 日）

ロシア・モスクワに暮らす日露夫婦、夫の塚原秦（シン）さんと、妻のエカテリーナ（カーチャ）さん。二人の YouTube チャンネル「シンとカーチャんねる/モスクワ在住夫婦」は、シンさんという日本人の目線を通したロシアの日常生活が見られることで、人気を集めている。妻のカーチャさんは陶芸家として活動しており、日本にもファンが多い。塚原さん夫妻へのインタビュー前編は、カーチャさんが陶芸を始めた意外なきっかけや、普段使いできる食器づくりにこだわる理由、日本とのつながりについて話を聞いた。
カーチャさんは日本語が堪能で、シンさんとの会話は日本語とロシア語半分ずつだという。ロシアで日本語を始める若者の動機のほとんどはアニメや漫画だが、カーチャさんの場合は、読むだけでなく漫画を描いてみたいという気持ちが高まって、大学生の時に日本語を勉強し始めた。カーチャさんは美術大学でデザインを専攻し、絵画や服飾、フラワーアレンジメント、ぬいぐるみ製作に至るまで、あらゆるものを手作りすることができた。また、教職課程も取っていたので、在学中からすでに美術教師として働いていた。
日本語会話クラブが主催するピクニックで、当時モスクワに留学中だったシンさんと出会った。2015 年 8 月、交際中の二人は、初めて一緒に日本を訪れ、シンさんの家族と一緒に三浦半島に遊びに行った。そこには藍染めやガラス工房など様々な体験型のレクリエーションがあり、どれも楽しかっ

たが、カーチャさんが一番気に入ったのが陶芸だった。カーチャさんはその時のことを「陶芸の工房がとても素敵で、なんて温かい雰囲気に包まれているのだろうと思いました。それまで作っていたもの、やっていたことは、どれも面白かったですが、面白いだけで終わっていました」と振り返る。

ものづくりを自力で追及するのが好きなカーチャさんは、モスクワに戻ると早速ろくろを購入し、ネットで動画を見て陶芸の修行をしつつ、わからないところは日本の陶芸の先生に質問した。シンさんも協力し、陶芸をビジネスとしてやっていくためのオンラインセミナーなどを受講しながら勉強した。シンさんは「失敗してもいい。若いうちにやりたいことをやろう」と背中を押した。

二人の絆はどんどん深まり、2017 年の春に結婚することに。まずはロシアで結婚手続きを行い、10 月に日本で本格的な結婚式を挙げることにした。カーチャさんは「自分で引き出物を作りたい」と、日本で行う結婚式に向けて作品を作り始めた。カーチャさんは「今思えば、素人感満載で恥ずかしいのですが、その時のプレゼントはとても喜んでもらえました。10 月は私の誕生月でもあり、秋をテーマにした結婚式がしたかったんです。シンさんがたくさん準備してくれ、完璧な結婚式でした」と嬉しそうに話す。

それとほぼ時を同じくして、ロシアでは、手作りの品を売りに出すことが流行し始め、ハンドメイド作品を扱う催しが各地で開催されるようになった。カーチャさんは窯を購入したり、個人事業主の資格を取るなど、陶芸をより本格的に行う準備を整えた。

ロシアの学校やモスクワ日本人学校で美術指導をしていたため、自由になる時間は少なかったが、2019 年 7 月にはとうとう、夢だった自分の工房をオープンすることができた。シンさんも、日本で釉薬を調達したり、工房のリフォームを行うなど、全面的にサポートした。工房のために借りた物件は、二人いわく「半地下の、牢屋みたいなところ」だったが、それでも初めての工房はとても嬉しかった。陶芸を指導したり、作品を作って販売したりと、それから 2 年あまりはすこぶる順調だった。地味でも地道に活動していると、口コミでたくさんの人がカーチャさんの作品を評価してくれたのである。

しかしロシアでは、悲劇は忘れた頃にやって来る。「牢屋」の家主から至急出て行ってくれと言われ、工房を引っ越すことになったのだ。シンさんは「日本人からすると、賃貸物件を借主が自分の資金でリフォームするのは違和感がありますが、こちらの人は普通にやっています」と話す。自分の好きな空間でないと創作意欲がわかないカーチャさんは、またしても新物件のリフォームを行わなければならなかった。ようやく第二の工房が完成し、親しい人たちで集まって乾杯した。その日は祝日で、2022 年 2 月 23 日のことだった。次の日、ロシアをめぐる状況は一変した。

ロシアを出る日本人が急増し、二人も日本に行く可能性を考えたが、夫婦で話し合った末、いられるだけロシアにいることを決めた。この段階で、シンさんはたまたま半年ほど前に YouTube を始めていた。気軽にスタートしたもので、登録者は 500 人ほどにすぎなかった。それが、ウクライナ情勢の急変で一気に視聴者が増え、現在では登録者が 3 万人を超えている。

当初こそいわゆる「アンチ」もいたが、今ではコメント欄のほとんどは応援メッセージだ。視聴者の多くは、若い二人の生活をハラハラしながら見守っている。今年の 1 月、カーチャさんの作品を日本で販売することにした時は、少し YouTube で告知しただけで、わずか 30 分で完売した。最近、カーチャさんが作るお皿やコップ、湯呑みなどは、モスクワの著名な日本料理店で使われている。新規オープンする寿司店のインテリア作品の注文も入っており、創作の幅を広げている。

先の生活が見通しにくいロシア。身近な夢はある？とカーチャさんに聞くと、「もっともっと作品を作りたい」とシンプルな答えが返ってきた。

「日本が大好きですし、日本に行くこと自体はよくても、私にとって工房は子どものようなものです。

日本に引っ越すかどうかという話が出たとき、この心をこめて作った工房を置いていけない、と思いました。この工房で作品をたくさん作りたいし、日本の皆さんに手に取ってほしい。そして、引き出物の時のように、作品が生活の中で使われていることが、何よりも嬉しいんです。もちろん、芸術の観点からは、抽象的なオブジェや大きな置物も含め、色々なものを作ってみたいです。でも私にとって、作品が実用的であることはとても大事ですし、気軽に使ってもらえるよう、高価になりすぎないことを心がけています。そして、ものを作る人ならみんなそうだと思いますが、私がいつかいなくなった後にも、作品は残ってほしいと願っています」

塚原エカテリーナ（カーチャ）さん（陶芸家）

後編では、日本人夫・シンさんに、モスクワに残った理由や、自身のチャンネルに込めた想い、ロシア人家族とのカルチャーギャップ、ロシアで実現したい夢などについて、話を聞く。